
いつもどこかで事件がおきる

優彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつもどこかで事件がおきる

【Nコード】

N0103B

【作者名】

優彩

【あらすじ】

元刑事の私立探偵、村瀬佳奈子がいろいろな場所で行くんな事件に巻き込まれる。

事件：1本物の探偵は殺人事件の謎を解いたりはない

プロローグ

探偵と言っても別に、小説やドラマのように殺人事件の謎を解くのが仕事ではない。

仕事内容は人探しの、浮気調査だの、そういったことがほとんどで、殺人事件に関わることなんてめったにない。

それはここ「村瀬探偵事務所」でも例外ではなく……と言いたいところだが、そうとも言い切れないのである。

なぜならこの事務所には、村瀬佳奈子がいるからだ。

(1) 値段の安いお茶なんか飲めない(前書き)

サブタイトルは本文とあまり関係ないので、深く考えないでください。

(1) 値段の安いお茶なんか飲めない

村瀬探偵事務所に和泉温子^{いずみあつこ}という女性から依頼が入ったのは、五月の終わりごろのことだった。

久しぶりのクライアントだったので、所長の村瀬菜摘^{むらせなつみ}は、いつにもなく上機嫌になっていた。

アシスタントの谷口知頼^{たにぐちちより}に、いつもより高級なお茶を出すように促すと、菜摘は自分の携帯で誰かに電話を掛け始めた。

「もしもし、菜摘だけど、佳奈ちゃん、今どこ？」

『どこってバイト中。いちいち訊かなくても知ってるでしょ？』

電話の相手は、少々不機嫌そうに答えた。

「今さあ、事務所にクライアントが来てるんだけど、バイト切り上げてこっちに來てくれないかなあ？」

『何の依頼？ 人探しか何か？』

「それは、佳奈子に直接会って、話したいって」

『そう。じゃあ、すぐそっちに行くから』

そう言う相手はすぐに電話を切った。菜摘は特に、気にはしないいつものことである。

電話をし終わると、菜摘はクライアントのほうに目を向ける。

和泉温子は出されたお茶を飲んでいた。いつもは安いお茶しか出さないが、今日はそんなことは言ってはられない。約二ヶ月ぶりに依頼が舞い込んだのである。逃がすわけにはいかないのだ。

「そのお茶どうですか」

菜摘は温子の座っているソファの向い側に腰掛けながら訊いた。

「はい。とってもおいしいです」

そう言つて、彼女は湯飲みをテーブルに置いた。

「そうですか？ よかったあ。安物のお茶だったから、お口に合
わないかもつて、心配だったんですよ」

あえて安物のお茶だとアピール。

「そんなことないですよ。これ、。グラム何千円つてする、けっ
こう高いお茶なんじゃないですか」

「わかります？ 実はけっこう奮発したんですよえ。ははは。見
栄張ちやつてすいません」

さすが旅館の仲居をしているだけあつて、温子はお茶に詳しいのだ
ろうと菜摘は思った。

「ところで、村瀬佳奈子さんと菜摘さんつて、ご姉妹が何か？」

「あー、従姉妹なんです。従姉妹。父親同士が兄弟なんですけどね。
この事務所も本当は私の父親のものなんですけど、私が無理言つて
譲り受けたんですよ」

「そうなんですか。……それにしても、佳奈子さん遅いですね」

温子は壁に掛けられている時計を見ながら言った。まだ、さっきの
電話から五分程度しか経っていない。何かほかに用事でもあるのだ
ろうか。いくら佳奈子のバイト先が近いからと言つて、たったの五
分でここに来れるはずはなかった。

「ああ、そうですね。すぐ来るつて言つてたんですよ……
依頼、先に私がお伺いしましょうか？」

「いえ、佳奈子さんに聞いていただかないと意味がないですから」
なぜ彼女は、そんなに佳奈子にこだわるのだらうと疑問に思った。

「和泉さん。うちの事務所はお知り合いの方からのご紹介だと伺つ
たんですが、佳奈子のこと知ってるんですか？」

「佳奈子さんは、元刑事さんだったつて聞きました」

「はあ、まあ確かにそうですね……」

たったそれだけの理由で？ とは、さすがに訊くことはできなかった。
佳奈子は確かに元刑事だ。だが、菜摘自身も刑事ではなかったが、
元警察の人間である。

ちょうどそのとき、事務所のドアが開くと、一人の女性が中に入ってきた。

「あ、佳奈ちゃんおかえり」

「ただいま」

そう言っていると彼女は、温子のほうに歩み寄り、自己紹介した。

「村瀬佳奈子です」

(2) 第一印象って、やっぱり大事でしょ？(前書き)

なんか、読みにくさがいつもより倍増している気がします。でもいいならどうぞ。

（２）第一印象って、やっぱり大事でしょ？

和泉温子の前に姿を現した女性は、彼女が想像していた人物とかなりかけ離れていた。

肩につくかつかないかぐらいの長さのミディアムヘアは、茶髪にしているようだが、新しく伸びてきた頭頂部の髪は三センチほど黒いままで、ここ何ヶ月か染め直していないことがわかる。しかも化粧つけもあまりない。ほとんどノーメイクに近いんじゃないだろうか、温子は村瀬佳奈子と名乗った女性の顔をまじまじと見つめながら思った。

「それで用件は？」

菜摘の隣に座りながら、村瀬佳奈子が訊いた。温子の目は見ずに、足を組んで腕組みしたかと思うと、軽く目を閉じていた。これが人の話を聞く態度なのだろうか？ 菜摘があえて彼女に何も言わないのは、いつもこんな感じだからなのだろうか。

「あの、私、新田旅館というところで、仲居として働いているんですけど、最近お客様からある苦情が殺到しているんです」

温子は佳奈子の様子を窺いながら話し始めた。

「苦情？」

佳奈子ではなく、一緒に話を聞いていた村瀬菜摘が思わず反応する。佳奈子のほうは、黙ったままで、話を聞いているのかいないのか、腕組みをして目を閉じたままだった。温子はそんな彼女の様子を気にしながらも、かまわず話を続けた。

「ええ、実はうちの旅館は温泉を源泉から直接引てるんですが、最近、お湯が温泉じゃないような気がするって、お客様のほうからご指摘がありましたで……」

そこまで言っていると、温子は口を噤んだ。

「私、本当はこんなこと言いたくないんですけど、もしかしたらうちの旅館、温泉を偽造しているんじゃないかと思うんです。だから……」

先程まで黙っていた佳奈子が温子の言葉を遮った。

「だから私に温泉の調査をしてほしいと依頼しにきたってことですか」

「ええ、まあ、そういうことです」

「ふん。でもそれって、何か少し変じゃありません？」

さっきまで閉じていたはずの佳奈子の目が、まっすぐ温子の目を凝視していた。けて大きな瞳ではないが、切れ長の奥二重の瞳には、確かな目力が存在している。

「えっ？　どういう、意味ですか？」

温子は、そう訊き返すのがやっとだった。村瀬佳奈子は、温子のことを訝しがっている。

「だって、よく考えたら変じゃないですか。私は温泉の水質調査の専門家でもなんでもない、ただの探偵事務所の一員にすぎない一般人。そんなやつところにわざわざ、自分とこの旅館の不正暴いてほしいなんて、依頼しに来るなんて」

温子はもう、何も言えなかった。そのセリフを言う間中、佳奈子はじつと温子の目を見つめていた。獲物を捕らえて放さないかのようにその目は、温子をその場に縛り付けて、決して放そうとはしない。「ちよつと佳奈ちゃん。いきなり何言い出したの？　あんたは」

横にいた菜摘も、少々困惑気味に佳奈子に小声で突つく。しかし彼女は、そんな菜摘や温子にはお構いなしに、ふいに立ち上がるとコーヒーを淹れ始めた。

「和泉さん。あなた、私にこの依頼を頼みたいようだけど、なぜ菜摘ではなく、私なのか？　何か理由でもあるのかって、さっきからずっと気になってただけど」

「それは……村瀬さんが昔、警察にいたって聞いたから……」

温子は恐る恐る佳奈子のほうを見上げながら、そう答える。

「村瀬さんって、二人とも名字『村瀬』なんですけど」

佳奈子はコーヒを口に含みながら、どうでもいい突っ込みをいれた。

「ああ、すいません。佳奈子さんのほうです。昔、刑事さんだったって、聞きました」

「ええ、二年前まではね」

元いた場所に再び、腰を下ろしながら佳奈子は答えた。

「ちょっと待って！ 私も警官だったんですよ。結婚する前は。と言っても別に、佳奈子みたいに刑事とかじゃなくて、ただの婦人警官だったんだけど……」

菜摘が無理やり話に加わろうとしたのだが、二人はそれを軽く無視して、話を進める。

「私が元刑事だったことと、今回の依頼は何か関係があるんですか」
ひざの上に置いている手のひらがさつきから、少し汗ばんでいるのは気のせいではなかった。村瀬佳奈子は、すんなりと依頼を引き受けてくれそうにはない。

「実は、さっき私が言った温泉の話は、あくまでも表向きで、本当はこれのことを相談しに来たんです」

そう言って、温子は意を決したように二人の前に一枚の紙を差し出した。

「きよ、脅迫状!？」

菜摘は驚きの声をあげたが、佳奈子は全く動じない。それどころか顔色ひとつ変えずに、その脅迫状に目を通し始めた。

「本当は、とりあえずうちの旅館に来ていただいてから、そのとき詳しい話をしようと考えていました。でもそんなこと思わずに、最初から素直にきちんとお話すればよかったですね」

「話は、まあわかりました。あなたが働いている旅館の経営者、田^{たな}辺隆三^{べんりゅう}さんの命が狙われているということですね」

「はい」

「えっ？ どういうこと？」事態を把握できていない菜摘に、佳奈

子は脅迫状を渡す。

「うちの社長は、昔から裏で卑怯な手を使って、あの旅館を大きくしてきたらしいんです。だから、人から恨まれていても全然、不思議ではありません」

「それで一ヶ月以内に旅館を閉じないと、社長を殺すぞって、脅されてるわけか」

佳奈子はまるで独り言のようにそう呟くと、「この依頼、引き受けましょう」と温子に向かって言った。

「本当ですか。よかった。こういうの本来なら警察に相談するべきなんでしょうけど、脅迫状に『警察に知らせるな』って書いてあったから怖くて怖くて」

「——それにしても、温泉偽造って、なんか前にもどっかで聞いたことがあるような話ですね」

顔が引きつるのが自分でもわかった。その反面、温子は突然、佳奈子は何を言い出したのか、一瞬わからなかった。

「もし本当に温泉が偽造されているのだとしたなら、その犯人はいったい何がしたいんでしょうね。そんなことしてもお客さんが減るだけなのに……」

「佳奈ちゃん何言ってるの？ ただのいたずらかもしれないでしょ。菜摘が横から口をはさんだ。」

「そうね。まあ、ちゃんと調べてみないと、はっきりとしたことは言えないわね」

(3) 客商売の基本は笑顔(前書き)

『いつもどこかで事件がおきる』ってタイトルのくせして、まだ事件がおきる気配はありません。

(3) 客商売の基本は笑顔

まちだりようすけ
町田諒介は、とある温泉街を歩いていた。

土産物屋が連なっている通りを歩いていると、ある一軒の土産物屋の前で足が止まる。

白い湯気がもくもくと出ている、おいしそうな蒸しまんじゅうが目に入ったからだ。

「いやあ〜これ、おいしそうですね〜。ひとつもらおうかなあ」
そう言つて財布を取り出しながら、ふいに店員の顔を見ると、彼はハツとした。その顔に見覚えがあつたからだ。

「村瀬さん？　村瀬佳奈子さんじゃないですか」

その問いに店員は「はっ？　あんた誰」とだけ返す。

「またまた、とぼけちゃつて。僕ですよ。フリーカメラマンの町田諒介ですよ」

穏やかな笑みを浮かべながら、町田は知人であるはずの村瀬佳奈子にあらためて自己紹介する。

「それは知ってるけど、なんであんたここにいるのよ」

蒸しまんじゅうを町田に手渡しながら佳奈子は訊いた。

「なんでつて、仕事ですよ。新田旅館つていう旅館に知り合いがいるんですけど、その人に旅館の新しいパンフレット作るからつて頼まれちゃつて、写真撮りに来たんです……つて、あんたちゃんと僕のこと覚えてるじゃないですか！」

「ふ〜ん。奇遇ね。私もその旅館にちよつと用があつてね……」

「えっ！　旅館に用つて、もしかして事件ですか？　事件!？」

町田は急に興奮した様子で、目を輝かせている。

「違う違う。ただの調査依頼よ」と、あっけなく否定すると、町田

は（なんだ。つまんねーよ）と言わんばかりに、がっかりとした顔を浮かべた。未だに、探偵が殺人事件を解決する職業だと勘違いしている町田のバカさ加減に佳奈子は呆れ返った。

「それより、なんでこんなところで働いてるんですか？」

このとき、もうすでに町田は、蒸しまんじゅう一個をペロリとたいらげていた。

「なんでって、別に。ちょっと頼まれただけよ」

「ちょ、ちょっと頼まれただけって、答えになってないっすよ」

ここで会話が途切れた。佳奈子は、もくもくと湯気が立ち昇っているなか、黙々と蒸しまんじゅうを蒸し続けていた。町田のことも無視し続けていた。

町田は思った。やっぱりこの人は、いまいちよくわからない。もう何度か会ったことがあるのに、未だに知らない人のフリをされるそれだけではない、町田に対してやけに冷たい態度をとられるのだ。いつも基本的に町田は無視されることが多い。

（もしかしたら僕、嫌われてる？）

思い当たる節は、町田にもあった。おそらく初めて会ったときに、本気で彼女のことを疑ったことが原因だろう。そのことはもうすでに謝ったが、どうやらこの様子だと、許されてはいないらしい。

「あのー、村瀬さん、もしかしてほ……（僕のこと嫌いですか）」
そう訊こうとしたときだった。観光客と思しき中年女性の三人組が現れ、町田を跳ね除けると佳奈子に蒸しまんじゅうを注文した。そのとき、町田は偶然にも決定的瞬間を目撃してしまった。

佳奈子はさつきまでの無表情と淡々とした口調が嘘のように、生き生きとしたにこやかな笑顔を浮かべて接客をしている。普段の彼女からは、想像もできない姿だ。まだ数回しか会ったことがないとはいえ、町田も彼女のそんな表情を見たのは初めてだった。

「何ですか。今の？」

町田が興奮気味に訊いた。客が立ち去ると、佳奈子はまた元のポーカーフェイスに戻っていた。

「何って、客商売の基本は笑顔よ」と、真顔で答える。

「いや、そうじゃなくて……」

町田はなんだか、佳奈子の親になったかのような心境になっていた。「村瀬さんって、ちゃんと人並みに笑えるんですね。あんなに、にこやかに笑った顔の村瀬さん、初めて見ましたよ」

そう言くと佳奈子は（おまえそれ失礼だろ）と言わんばかりに、町田をにらみつけていた。さっきのあの笑顔はもう、想像できない。まるでヘビににらまれたカエルのような状態になってしまった町田が何も言い返せないでいると、数秒後、先に佳奈子が口を開いた。

「まあ、こう見えても高校時代は演劇部に所属してたんだから」

独り言のように呟くと、彼女は自分の腕時計に目を落としていた。

（えっ？ 何、今の。独り言？）

さっきのあれは演技だったとしても言いたいのだろうか。町田が何かなんだかわからず、あつけにとられていると、その店の店主であるう、五十代くらいのおばさんがどこからか戻ってきた。

「あーもう、ほんとにごめんなさいねえ。店番なんて頼んじやって」
そう言うおばさんの両手には、持ちきれないほどの大量の荷物が握られていた。スーツケースを転がしているのを見ると、どうやら旅行から帰ってきたようだ。

「旅行どうでした？」

さきほどのにらんだ目つきが見間違いだっただかのように、佳奈子は少し微笑んで穏やかな口調だった。

「もう、そりゃ楽しかったわよ」。初めての海外よ。懸賞に応募したって、当たったためしなかったのに、人生で今が一番ついているわね」

おばさんはにこにこ顔で、佳奈子にお土産を手渡す。それはマカダミアナッツ入りのチョコレートだった。笑顔でお礼を言う佳奈子。

町田は、幻でも見ているような気がしてきた。

「あ、あの……」

町田が二人に声をかける。

「あら、お客さん？ ごめんなさいね。ちょっと気づかなくて……」
「いや、そうじゃなくて」

町田は一瞬、佳奈子に視線を移すと、すぐにおばさんのほうに目を向けた。

「何で、彼女ここで働いてるのかなって、ふと疑問に思って……」
佳奈子に直接訊いても、教えてはくれなかった。

「ああ、村瀬さんは一週間だけ、店番してくれてただけなのよ。ちょうど一週間前にね、私、懸賞で海外旅行が当たっちゃって。でもうち、旦那が早くに亡くなって独りだから、店休むことにしてたんだけど、彼女がちょうどいいタイミングで店番引き受けてくれたのよ」

「はあ」

（なんか、都合良過ぎないか？）町田は佳奈子に再び、視線を送る。彼女は何でか、さつきからしきりに時計を気にしている。どうせ佳奈子が裏で何か仕組んだのだろうと、町田は思った。

「私、そろそろ行かないと……」

佳奈子がおばさんに向かってそう切り出した。

「行くってどこへ？」

偶然に町田とおばさんの声が被った。

「実は私、本業はフリーの雑誌記者なんですけど、新田旅館を取材しに来たんです。今日、約束の日なんで、これから行かないといけないんです」

「あら、そうだったの？ それじゃあ、仕方ないわね。でもそれじゃ、店番どうしようかしら」

（誰が雑誌記者だ？）

よくもまあ、そんな嘘を平気でつけるもんだなと、町田は妙に感心していた。おばさんは何の疑問も持つてはいないようだ。そればかりか、店番くらい自分がすればいいのに、旅行から帰ってきたばかりで疲れているという理由のためなのか、店番をどうしようか真剣に考え込んでいるようだった。

しばらくして佳奈子は言った。

「この人、好きに使ってやってください。こう見えてこの人、無職なんですよ。実はちよつとした知り合いなんですけど、職探しに困つてて……」

（よくもまあ、そんな嘘を！？）

「あら、そうだったの？ それじゃあ、悪いんだけど店番頼まれてくれる？」

「えっ？ な、なんで僕が？」

「いいじゃない、職探しの手間が省けて」

そう言いながら、佳奈子はつけていたエプロンを外すと、町田に手渡して去っていった。

「ちよつとあゝ、村瀬さあゝん。待つてくださいいよあゝ」

すると佳奈子はふと立ち止まり、振り返ってこう言った。

「町田。客商売の基本は笑顔よ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0103b/>

いつもどこかで事件がおきる

2010年10月9日21時29分発行